



長岡市立図書館開館 100 周年記念

図書館の思い出 インタビュー

図書館は多様性を育む場所

～天才プログラマー・清水亮さんインタビュー～



清水 亮（しみず・りょう）

1976年新潟県長岡市生まれ。株式会社UEI代表取締役社長兼CEO。6歳の頃からプログラミングを始め、国際情報高校在学時には、雑誌にプログラミングについての連載ページを持つ。電気通信大学在学中に米Microsoftにて家庭用ゲーム機開発や技術動向の研究・教育に携わる。98年ダウンゴ入社、エグゼクティブゲームディレクターとして携帯電話事業を立ち上げ、2002年退社。2003年より独立し、現職。2005年、独立行政法人IPAより天才プログラマー/スーパークリエイターとして認定される。

プログラミングの第一人者として知られ、現在、人工知能の開発企業UEIを率いている清水亮さん。新潟県長岡市で生まれ育った清水さんは、いくつもの著書やブログを通じて、少年時代をほぼ毎日図書館で過ごしたと語り、身近に図書館があることのすばらしさを伝えています。6歳からプログラミングを始め、16歳で3DCGライブラリを開発した少年が、長岡でどのように育ったのか、また図書館との付き合い方はどのようなものだったのか。清水さんの思い出の場所であり、今もたびたび通うという長岡市立中央図書館で、お話しをお聞きしました。

画面を自分で変えられる

コンピューターに魅了された幼少期



——清水さんがなぜコンピューターに興味をもったのか、そもそものところをおうかがいしたいのですが。

僕が生まれた年（1976年）、日本で最初のマイクロコンピューターTK80（NEC）が発売されました。北越製紙のエンジニアだった父は、長岡市内の勉強会でこれからはコンピューターが買える時代になるらしい、ということがわかり、生まれたばかりの自分の息子をコンピューターができる人間にしようと思ったと言っています。

1976年には長岡技術科学大学が開学しています。オープンキャンパスのたびに何度も父が連れていってくれました。ここで初めてコンピューターを見たんです。テレビのような画面に何か書いてあり、ボタンを触ると変化する。それが衝撃でした。当時、まだテレビに接続するビデオもゲーム機もない時代ですから、テレビ画面というのは基本的には受信しかできなくて、チャンネルを変える以外に、自分でその中の映像を変えることはできません。それが、コンピューターだとできる、ということに夢中になりました。

記憶している最初にもらったコンピューターは、幼稚園の頃。タミヤの8000円くらいのセットで、ブルドーザーとかショベルドーザーをモーターで動かす、その制御部分をプログラムできるという商品だったと思います。でもそれはすごく簡単なことしかできなかった。俺

が思っていたのとは違うなと思って。

それで、コメリやパルスのパソコンコーナーや、大手通り添いにあった丸専デパートのマイコンショップに行っては、展示用のパソコンで遊んでいました。大人が買い物している間はずっとパソコンを触っているんです。わけもわからずさわっているわけですが、適当にボタンを押したら、画面に何かうつるだけでおもしろかった。ゲームもしながら自分でいつかゲームを作りたいなと思っていました。

家に PC-9801 がやってきた！

プログラミングとの出会い



父は、ファミコンはゲームをやるだけになってコンピューターの知識は身につかない、と買ってくれなかったのですが、僕が小学校二年生の一学期のある日、家に帰ってきたら、NEC PC-9801 というパソコンが届いていました。当時、かなり借金をして買ったんですよね。それを一緒に使おうと言ってくれた。もう嬉しくて、学校に行く時間以外は一日中、パソコンをいじっていました。そうして一週間したら父より詳しくなっていたんです。もっとも父は忙しくて勉強する時間がなかったからでもあるんですが。

今でも鮮明に覚えています。くだらないことしかやっていなくて。適当に文字をおいて、ロケットの絵を描いて、これが俺の書いたコンピューターグラフィックスだ！って（笑）。母に見せたら、すごいねって。で、「これどうやったらとっておけるの？」と言われて、どう

するんだろうね?と思ってボタンを適当に押したら、画面の絵がぱっと全部消えちゃった。保存できなかったんです。

で、保存はどうやるんだろうって適当にいじっていたら、どうやら、頭に数字があると、残るらしいということがわかった。なんで頭に数字があると残るのかな?しかも、適当にファンクションキーとか押すと、リストが出てくる。あれ、さっきうったやつがでてきた。なんだろう、と。実はこれが、BASICっていうプログラム環境の特徴で、行番号がついていると、それはプログラムとみなすんです。偶然1とか5とかつけたものが、行番号で保存されたんですよ。僕はそれを覚えたんです。そうして、マニュアルを見て、REMっていうのを頭につけると、絵も保存されるということがわかった。でも、保存しただけだとプログラムっぽくなくて、またマニュアルを読む……。そうやってマニュアルだけで勉強していくうちに、コンピューターの扱いやプログラミングに詳しくなっていました。

理系少年の天国だった

“偏った”雑誌コーナー



現在のコンピューター関連の書架を見る清水さん。



「当時はこのあたりにコンピューター関連の本があったんですよ」

——清水さんは中央図書館をよく使っていたということなのですが、それはどんなきっかけだったのでしょうか？

小学4年生になるとき、上川西小学校から新潟大学教育学部附属長岡小学校（通称・附属）に転校することになったのですが、その直前に中央図書館が開館したんです（1987年3月6日開館）。附属小の隣が図書館という環境だったので、学校帰りには100%ここにいました。日曜日を除いてほぼ毎日来ていましたね。

——図書館でどうやって興味ある本を探していききましたか？

最初は自分が好きなジャンル、コンピューターの本とか、宇宙の本とかを探しました。それに、ここは雑誌がたくさんあったのもよかったんですよ。それもものすごくマニアックな理科系の専門誌がたくさん。『数学セミナー』『Newton』『日経サイエンス』もあったかな。『子供の科学』、『CQ ham radio』『トランジスタ技術』……。東京の図書館で『トランジスタ技術』貸してるところを見たことないですよ。あと『世界の艦船』とかね。

僕みたいな人間が育たなかったら変、というくらい一風変わったおもしろいセレクションなんですよ。今思えばね。世の中に雑誌がこれだけ種類あるのに、どうしてこんなセレクションだったんだろうな、っていう。

僕にとっては天国だったんですよ。



雑誌って子どもが書店で立ち読みしたら煙たがられるし、「おまえそんなの読むのか」っていう周りの視線が気になるじゃないですか。でも読んでみたいし、けっこう高い。500円のおこづかいで、毎月3種類くらい出ているコンピューターの雑誌をどれを買おうか、いつも迷うわけ。そうすると、でもゲームとかがメインの買えないほうの雑誌に、意外とおもしろいこと書いてあったりして。そういうのを図書館で読むんです。

僕はその時代の『月刊アスキー』がすごく好きで。当時のアスキー黄金時代を築いた編集長の遠藤 諭（えんどう さとし）さんは長岡出身の人なんです。『料理はプログラミングだ』っ

という連載で料理のしかたが書かれていたり、『哲学者クロサキのパソコン活用法』では本物の哲学者（黒崎政男）が、MS - DOS の使い方書いてるんです（『哲学者クロサキの MS - DOS は思考の道具だ』として書籍化）。ほかにも、ボードゲームとか、海外ドラマとか、アメリカの SF 大会の横ではこんなイベントをやっていた、とかそんなことがいっぱい書いてある。コンピューターの話があまり書いてないのに、全体として読むとちゃんとコンピューターの本なんですよ。そこが遠藤さんのすごいところですよ。もう『月刊アスキー』さえ読んでいればずっと時間をつぶせました。しかも図書館にはバックナンバーがあるから、ひたすらさかのぼれるだけさかのぼって。

そうしているうちに、さすがに、司書の人に顔と名前を憶えられて、今度こういうおもしろい本が入るよ、とか教えてもらえるようになりました。ここの司書の人にはすごく世話になりました。

小学生からの図書館通いで

身に付いた「教養」



僕が小中学生時代、この図書館に通って、一番得たものって“教養”だと思っているんです。美術、軍事史、数学、工学、物理学、力学……。それに、映画とか、演芸、演劇とか。そういった世界があって、そこにはこういう魅力がある、ということ、全部ここで教えてもらった

と思っています。普通に生きていたら、ドラクロワの絵とかなかなか見ないでしょう。だけど僕はここで日常的にそういうものに触れることができた。

先ほどの話の続きになりますが、さすがにコンピューターの本って少なく、全部読み終わっちゃった。それで他の書架にもおもしろい本ないかな、と全部の書棚を何度も回っているんです。じゃあ全然興味ないやつ見てみようと思って、すごくでっかい美術の本をとりあえずめくってみて「デ・キリコ、よくわからないけどおもしろい」みたいな。すると中学の先輩や同級生が通りがかって、「あ、清水そういうの好きなんだ、こっちはいいよ」と声をかけてくれる。

——ほかの分野を好きな人と交流して、読む本のジャンルが広がっていくと。

そうそう。芸術ジャンルの話になると、吹奏楽部とか、美術部の部員の人たちは詳しいわけですよ。これがいいよ、とか、きどった会話をしながら、本をめくるだけで楽しい。

人工知能も人も

多様性が成長の鍵!?

僕は、子どものころからいいものをたくさん見ることで、よさとか価値とかがわかるようになるんじゃないのかな、と思うんです。人工知能もそうだけど、たくさんものを見ないと育たないんですよ。

——ここで人工知能の話につながるんですね。

多様性がないと育たないですよ。人工知能って。

——多様性！ まさにでは、図書館はそれを育てる場ということですね。

そうそう、まさにそうなんですよ。だから僕は今でもたいていの話についていけます。野球の固有名詞や、どんな選手がどんな記録をもっているかみたいなのは興味ないけれど、昔の野球の本は読んでいて、どういう魅力があるのかは知っている。演劇だって見に行きます。エンジニアとして考えたら、演劇を見に行く必要なんてないんだけど。でも、図書館に鴻上尚史(劇団『第三舞台』主宰、劇作家・演出家)の本とかがあって、学校で演劇やる時、脚本を書くのに参考にするために、図書館で本を探して戯曲と出会っている。自分の生活と結びつくわけですよ、図書館が隣にあると。



バラエティ豊かな選書のヒミツとは



中央図書館は、雑誌のセレクトもおもしろいですが、一般書のほうもそうとう変なんですよ。ここみたいにバラエティがあっかつ、ちょっと偏っているみたいなところは東京でもなかなかないんじゃないかな。

怪しい本を置ける図書館はすごいと思っているんですが、ぼくが一番笑ったのは、ここにはノストラダムスの大予言の本とかが全部あるところ（註）。さらに「俺はノストラダムスの生まれ変わりだ」って言っている人の本もあって、それが、「ギャグ」みたいなコーナーではなく

「神秘・宗教」とか信じてる人たちにも配慮されたタイトルのジャンルに置いてある（笑）。

編集部註・16世紀の医師で予言者ノストラダムスが残した言葉のひとつに「1999年7の月、空から恐怖の大王が下りてくる」という一節があり、人類滅亡を予言したものではないかと解釈した五島勉著「ノストラダムスの大予言」（1973）をきっかけに、1970～90年代当時、ノストラダムスの予言はブームとなっていた。

そうした怪しい本、楽しいだけの本、役にたつ本、それらに混じって、陸軍の昔の作戦要項もあつたりする。こんな本、誰が読むんだろう、それにここの図書館以外、どこに行ったら読めるんだろう、と思います。そういう本もちゃんとあるところがすごい。



戦史叢書「陸軍作戦」の書架。

山田館長「選書に力を入れているんですよ。毎週、書店取次から送られてくる200～400冊もの本を職員が見て、選んで、選書会議に出すんです。最初、タイトルなどでいいな、と思った本でも実際に中身を見るとあまりいい本ではなかったということもありますので、現物の本を手にとって見て決めるようにしています。それを毎週繰り返しています」

タイトルだけ見て選んでいるわけではないんですね。素晴らしい。集合知ですよ。そこまでした本がつまらないわけがないですよ。本屋さんに行っても売ってない、図書館でないと読めない本があるというのが、図書館に来る意味なんです。本屋さんの本って一定期間でリベースされてしまうし、売れる本が中心です。でも売れる本＝いい本とは限らないでしょう。むしろ、本当におもしろい本とか、本当に読む価値がある本っていうのは図書館に来ないと読むことができない、ということ、ここですごく学びましたね。

興味がないジャンルを

あえて開拓しに行く場所



——図書館は、小中学生くらいの子どもたちには教養を得る場所、多様性を身に着ける場所になる、とのお話でしたが、大人はどんな使い方をするといいでしょう？

僕は企画系の部下には「自分が興味持てないことを調べてみなよ」って言うんです。私これ興味ないな、ということ調べてみたら意外とおもしろいかもしれないじゃない？って。興味がないということは、あなたにとってそれはボーナスだよ、ゲームでいったら、マップのまだ通過していない迷路みたいなものなんだからって。物理学やったことないならやってみたら、美術見たことないなら見てみたらって。

大人は自分の見たい本を見にくるじゃないですか。それは図書館の使い方としてすごくもったいないですよ。だって自分の見たい本は本屋で買うし。自分に殻を作ってしまうなんてもったいない。選書会議で様々なバックグラウンドをもっている人が、本気で選んだ本なんだから。ノンジャンルで週に200冊を超える本を毎週見て、選書眼を鍛えられた人たちによって、この本はおもしろい、限られた書架のなかで置く価値がある、と一回吟味されているというのがすごいことじゃないですか。図書館は言ってみれば知のセレクトショップなんです。しかも無料で使える。

『シムシティ』に見る図書館の役割



『シムシティ』という都市をつくるシュミレーションゲームがあるのですが、このゲーム、図書館を建てるとまわりの知能レベルが上がるんですよ（笑）。さらに収入も上がるんです。ウィル・ライトというゲーム業界の伝説的なクリエイターが作っているのですが、彼、もしくはアメリカ人が考える図書館というのは、そういう機能をもっている。だから、アメリカ人は、金持ちになると、みんな図書館に寄付をするんですよ。図書館に寄付するというのは素晴らしいことなんです。だから、シアトルのワシントン大学には、ビル・ゲイツ図書館とかポール・アレン図書館とかがある。本だけでなく、ビルごと建てて寄付しちゃうんですよ。

——清水さんはそうやって海外の図書館にも行っているんですね。

シアトルのワシントン大学の図書館には、ヒンズー語の本とかも入ってるんですよ。ヒンズー語の本があるなら、読んでみようかと思って開いて「すげえ、全然読めない！」ってなる（笑）。でも読めない本があるというのも体験じゃないですか。ギリシャ語の本のコーナーに行くと、文学作品をめくっても、数学に見えるんですよ。全部アルファ、ベータ、シータ、シグマとかで書いてある。全然読めないけれど、数学みたい！ その発見、おもしろいでしょ？ そういう体験ができるのも図書館のいいところだなんて思うんです。

ある発展途上国でその国で一番大きな図書館に行ったことがあるのですが、蔵書が貧相でしかも英語で書かれた本しかなかったんです。これがこの国が発展途上である証拠だな、と思いました。

——図書館の充実度、豊かさが、その国、町の文化レベルとつながっているということですね。

長岡に帰るたびに

立ち寄りたくなる場所

僕はアメリカのダウンゴを辞めて帰ってきて、仕事がないときに、長岡に一回帰ってきたんです。会社を作ろうと思っていただけで、作り方がよくわからないし、やることもないし、金もないし、で、毎日また図書館に通うわけですね。で、図書館に来ると、仕事をしたくなるんですよ。その前にも、仕事を休んでいたときがあって、長岡に帰ってきて、図書館行って、本読んだり DVD 見たりしているうちに、仕事したくなってきて、東京帰るかって、なったことがありました。

ここは自分にとって、帰ると必ず来る場所です。図書館全般かどうかはわからないけれど、この図書館は本当に素晴らしいですよ。いつ来てもおもしろいもの。いっそ、図書館の近くに住むことをおすすめしたい（笑）。図書館の近くに住むって素晴らしいですよ！





平成29年9月27日 長岡市立中央図書館でインタビューを行ったものです。

企画・制作 な！ナガオカ編集部（長岡市シティプロモーション課）
発行 長岡市立中央図書館
〒940-0041 新潟県長岡市学校町1丁目2番2号
TEL (0258)-32-0658
FAX (0258)-32-0664
発行日 平成29年11月20日